

平成28年度学融合レクチャー実施報告書

講義名称	動物倫理学入門
申請代表者 (事業実施責任者)	研究科：学融合推進センター
	専攻：
	氏名：塚原 直樹
開催日時・場所	7月23日(土)～24日(日)・総研大葉山キャンパス
受講者数	国際日本研究専攻： 1名
	遺伝学専攻： 1名
	地域文化学専攻： 1名
	その他(外部) 6名

(行数が不足する場合には適宜挿入してください。)

○ 事業概要

本事業は、動物倫理という先端的な複合的研究分野の知見を学ぶとともに、研究成果に基づく多様なものの見方を実践的に学習することにより、文理にかかわらない研究者教育のプログラムとなっており、中期目標計画における、各④「高度の専門性をより深く習得させるため、又は異なる分野の知識や技術を必要に応じ習得させる」、⑤「研究者を目指す学生が身につけるべき知識・視点を提供する」、⑧「自立した研究者として、自らの研究の学問的及び社会的位置付けを俯瞰する」の項目に合致する。

○ 事業実施報告

「動物に魂はあるのか 生命を見つめる哲学」(金森修 著、中公新書)を読んで、動物倫理学とはどのような学問であるのか考えをまとめよ」のレポートを事前課題とした。

講義は以下を実施した。

7/23 13:30-15:00 ガイダンス(塚原・七田)

(目的) 動物倫理学とはどんな学問であるかを知る。動物倫理学に関わる考え方を学ぶ。

(具体的な内容) 事前レポートの発表。授業の目的。教員の紹介。功利主義、義務論、倫理的相対主義などの考え方をもち、動物解放論、種差別を紹介するとともに動物倫理学とはどのような学問であるのか概要を伝える。

7/23 15:10-16:10 講義1「人間と動物のかかわりと変遷」(本郷)

(目的) 時代とともに人は動物とどのように関わってきたか、その変遷を知る。

(具体的な内容) 狩猟民と動物のかかわり、家畜化によるかかわりの変化、自給的な家畜飼育と商業的な家畜飼育、「野生動物を食べる」ことに対する現代人の意識(「家畜ライオン」などを題材とした問題提起)。具体的には、奈良時代には使役動物を食べることは規制され、野生動物を食べることは認められていた、など、どちらかという現代とは逆転している。

7/23 16:20-17:20 講義2「さまざまな民族における動物観」(野林)

(目的) 世界には多様な文化が存在し、その異なる背景からさまざまな動物観が存在していることを知る。

(具体的な内容) トーテミズム (民族固有のトーテムの紹介) や動物供儀の例について紹介。人間と人間との関係を述べるために動物を介在させている文化がある。

7/23 17:30-18:30 講義 3「動物福祉の現状と動物愛護」(新村)

(目的) 日本人と欧米人の動物観の違いをふまえて動物愛護と動物福祉の違いを理解する。日本とヨーロッパの家畜の飼育方法の違いを学び、現在、日本が置かれている現状を知る。

(具体的な内容) 食べられる運命にある家畜の福祉とは何か? まず、欧米の法的規制と共に、それぞれの飼育方法がどのように福祉的で、どれだけの生産性があるかを紹介する。また、実際に畜産物を購入する消費者の意識調査と動物観も紹介する。それらと日本の現状・動物観を比較し、これから日本で必要とされることは何かを考える。

7/23 19:00-22:00 丸鶏の解剖実習、ディスカッション

※ 丸鶏から胸肉、腿肉、手羽などを取り外しながら、普段スーパーでパック詰めされているニワトリの肉が、どの部位であるかを塚原が解剖学的に解説。

7/24 9:00-10:30 講義 4・演習 1「有害鳥獣捕獲の是非」(塚原)

(目的) 日本における有害鳥獣捕獲の現状を知る。また、意見の対立が起こった実例をもとに、それぞれの主張の背景を知り、それらを材料として議論を行う。

(具体的な内容) なぜ有害鳥獣捕獲が行なわれているか? 野生動物による被害の現状。カラスを例に起こっている意見の対立。実際に塚原のもとに寄せられた意見の背景。参加者が塚原の立場だった場合にどのように対応するか考える。塚原が実際に行った対応。

7/24 10:40-12:10 演習 2「動物倫理ワークショップ」(七田)

(目的) 正解の無い問題に対し、自身の意見を持ち、議論する力を涵養する。

(具体的な内容) 「ヒトを食べる」ことが許されるか? を議論の皮切りに、どの種は食べることが許され、どの種は食べてはいけないのか? また、どんな条件であれば、ヒトや特定の種を食べることが許されるか? 教員を含めた参加者全員が自分の立場を決めて、「種差別は許されるか? 許されるとすれば、どの種であれば許されるのか、どんな条件であれば許されるのか」について議論する。



図. グループディスカッション時の様子

授業終了後のアンケートによると、参加者の動物倫理学に関する理解は深まり、講義の目標は達成されたと考えられる。その他、様々な分野の教員、参加者の意見を聞くことができ刺激を受けたなど、動物倫理学をキーワードに、異分野交流の促進の成果がある授業となった。

教員の事後の反省会では、「動物倫理学入門」の講義名がふさわしいかどうか議論された。倫理学の講義名であれば、哲学や倫理学の専門家の参画が必要であるとの結論となった。現状であれば、「人と動物の関係学」のような講義名がふさわしいとの意見が出た。また、事前課題に関しては適切であるかは再考すべきである、との意見が出た。

講義を受講した学生の感想が、学融合推進センターのブログ (<http://cpis.soken.ac.jp/blog/1607.html>) に公開されているので参照されたし。

○ 今後の事業展望

本年度はトライアルとして単位無しの講義とした。講義名を「動物倫理学入門」から変えずに単位を付す講義とするためには、応用倫理学の研究者を講義メンバーに加え、倫理的思考に関する内容を加える必要がある。また、事前課題についても倫理的思考の基礎を学べるような図書を選定する必要がある。

本年度の講義は、座学やディスカッションなどの演習がベースであったが、食肉処理場の見学などの実習を講義に加えることで、参加者がより深く学べる機会を作ることができると考えられる。

また、実験動物や狩猟、イルカ漁、動物愛護など、本年度の講義で取り扱わなかった人と動物の関わりに関する内容を講義に加えることで、より幅広い価値観を涵養することに結び付けられると考えられる。

動物倫理学は、人間の生活と直結する内容であり、動物にかかわる研究者以外にも興味を持ちやすい講義であり、また、倫理的思考を学ぶのに適した講義であるといえ、分野を超えた全学に開いた授業として展開していきたい。

○ その他

※実施報告書については、原則総研大ウェブサイトで公開いたします。

提出いただく実施報告書について、本学ウェブサイトにおいて『非公開』を希望する場合は、その旨記載してください。